

飛鳥寺北方の調査

—第188-19次、第192-1・9次

1 はじめに

第192-1次調査は、明日香村大字飛鳥の県道樅原神宮東口停車場飛鳥線上での電線共同溝および側溝工事にともなう事前調査として実施した。調査地は、西部が水落遺跡、東部が飛鳥寺跡および飛鳥寺下層遺跡にあたり、関連する遺構の検出が見込まれた。調査地は全長240m、幅約4mの道路上で、道路脇には民家等が建ち並んでいたため、工事に先行して発掘調査を実施することが困難であった。そのため、工事掘削に立ち会って遺構の有無を確認し、掘削が遺構面におよんだ東部では、6調査区(1~6区)で発掘調査をおこなった。

第192-9次調査は、電線共同溝から史跡指定地内の個別住宅への引き込み工事にともなう調査で、後述する④褐色シルト層の上面に掘削がおよんだ3調査区(1~3区)で遺構図を作成した。

調査面積は、第192-1次調査が立会調査対応部分を含め約480m²、第192-9次調査が12.4m²である。調査期間は、2017年5月15日から11月24日までである。

なお、本調査に先行して、ほぼ同一路線上でガス管移設工事にともなって2016年度に立会調査(第188-19次、「紀要2017」)を実施した。瓦をはじめとするまとまった量の遺物が出土しており、あわせて報告する。

2 基本層序

飛鳥寺の寺域西辺にあたる第192-1次調査1区周辺を境に、その東西で土層堆積の様相が大きく異なる。西部では、上から①路面舗装のためのアスファルトおよびクラッシャー層(25~50cm)、②現代盛土層(40cm)、③灰褐色・橙褐色・黒褐色を呈する遺物包含層(10~20cm)、④暗褐色微砂層(20~30cm)、⑤旧飛鳥川の河川性堆積である礫層の5層からなる。④層の上面(GL-100~110cm)が飛鳥水落遺跡の既往調査での遺構検出面に相当するとみられる。東部では、上から①路面舗装のためのアスファルトおよびクラッシャー層(25~40cm)、②現代盛土層(50~65cm)、③瓦を多く含む黒褐色土層(30~60cm)、④褐色シルト層の4層からなる。③層が近世初期(17世紀)ま

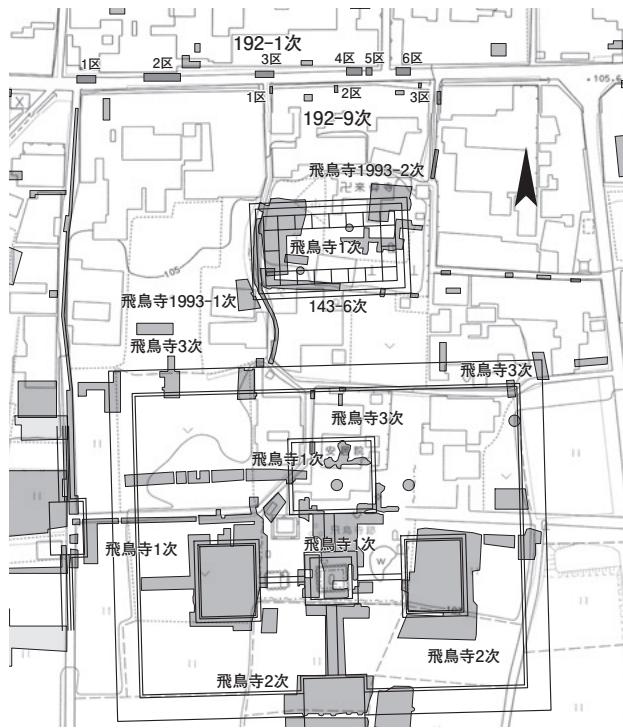


図137 第192-1・9次調査区位置図 1:2000

での遺物を含むのに対し、④層は基本的に無遺物で、この層の上面(GL-120~150cm)で遺構を検出したが、第192-1次調査4区以東では④層の上部に土器の細片を含む褐色シルトの堆積を認めた。

3 検出遺構

調査地西部では、明確な遺構を検出しなかった。第192-1次調査1~6区(図138)では、1・2区で柱穴を含む小土坑多数と南北溝1条を検出した。重複関係が確認できることから、遺構は少なくとも新旧2時期に分かれる。3~6区では土坑多数と溝状の落ち込みを検出した。遺構は複雑に重複しており、この一帯の土地利用が活発であったことを示す。4~6区で検出した溝状の落ち込みは、位置関係や瓦を大量に含む埋土の共通性から、一連の遺構として捉えた(SX2035)。

史跡指定地内の第192-9次調査1~3区では、2区で時期不明の土坑を1基検出したのみである。

落ち込みSX2035 第192-1次調査4~6区の北端で検出した東西方向の溝状の落ち込み。南肩を検出したのみで、全容は不明だが、平面規模は少なくとも南北0.8m以上、東西14.5m以上ある。深さは、埋土を掘り下げた第192-1次調査5区で④褐色シルト層上面から0.6m以上あることを確認した。埋土には少量の炭化物と、大量の瓦を含む。共伴した土器の年代観から、平安時代以降の廃棄と考えられる。

(土橋明梨紗・尾野善裕)

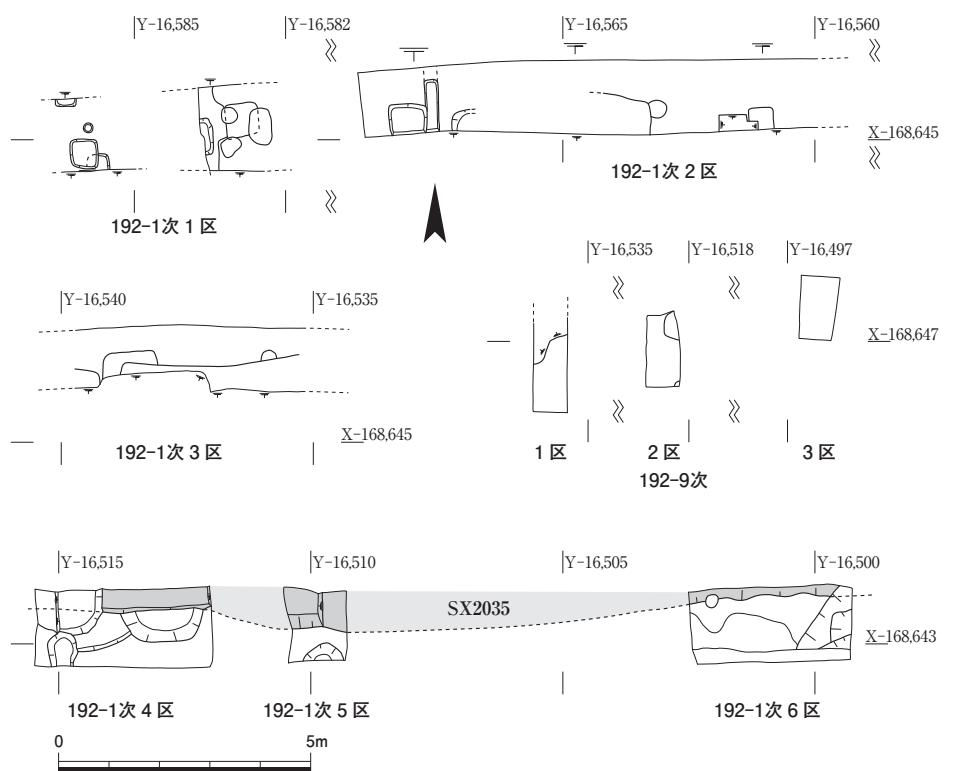


図138 第192-1-9次調査区遺構図 1:150

4 出土遺物

土 器 古代の須恵器・土師器を中心に、整理用木箱に35箱分の土器・陶磁器が出土した(図139)。大半が調査区東部の③黒褐色土層からの出土であるが、古代の土師器・須恵器が多く、円面覗を含む。遺構からの出土品は細片が多いが、SX2035からは須恵器甕片多数と共に、土師器の杯A・椀・皿Aなどが出土した。内面に二段放射暗文と連弧暗文を施した杯A(1)や藤原宮東面内濠SD2300から類品¹⁾が出土している椀(2)は、奈良時代初期以前に遡ると考えられる。無文の皿A(3)は、断面形態からみて平安時代前期のものであろう。土師器甕(4)は、重複関係からSX2035よりも新しいことが確実な土坑からの出土。
(尾野)

瓦磚類 本調査区からは、表21に示したように、大量の瓦磚類が出土した。時期は、古代から近現代までにわたるが、古代のものが多い。大半が調査区東部の③層から出土した。

ここでは軒瓦と鷲尾、磚を報告する。1~3は、弁端桜花形の素弁十弁蓮華文軒丸瓦の飛鳥寺I型式。計39点と最多の出土である。Ia(1)と、中房や間弁、弁端を彫り直したIb(2)、外縁を幅広く作るIc(3)がある。4~8は弁端点珠の素弁蓮華文軒丸瓦。3・4は十一弁の飛鳥寺III型式。計11点出土。間弁が中房に達しない

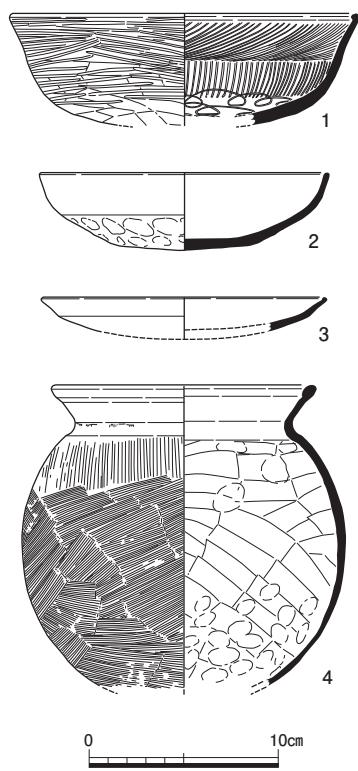


図139 第192-1次調査出土土器 1:4

IIIa(4)、範を彫り直して間弁先端が中房に届くIIIb(5)がある。飛鳥寺IV型式(6)・V型式(7)は飛鳥寺III型式に似るが、やや瓦当径が小さい。八弁の石神A型式(8)は、石神遺跡が分布の中心だが、飛鳥寺でも若干出土する。単弁八弁蓮華文軒丸瓦の飛鳥寺XⅠ型式(9)は、山田寺式に似るが、外縁は素文。10~13は複弁八弁蓮華文軒丸瓦。川原寺601型式同範の飛鳥寺XⅡ型式は、601C同範のXⅡC(10)、601E同範のXⅡE(11)が出土した。12・13は飛鳥寺XⅣ型式。合計32点と飛鳥寺I型式に次いで多い。XⅣa(12)と蓮子を彫り直したXⅣb(13)が出土したが、大半がXⅣbである。

14・15は重弧文軒平瓦。四重弧文の飛鳥寺II型式(14)は、重弧の挽き型や、胎土・焼成が川原寺651型式と共通するものが多い。17点と軒平瓦のなかではもっとも多い。15は五重弧文の飛鳥寺III型式。16は、大官大寺所用6661B同範の飛鳥寺IVB型式。17は飛鳥寺VI型式で平安時代初期のものである。18は中世の均整唐草文軒平瓦。

19・20は鷲尾。19は小型で胴部から鰭部の破片。段は胴部、鰭部外側とも正段で、内側には段がない。段幅は約2.6cmと狭い。縦帶は、最初に目印となるケガキ線を引き、線の周囲を削り出して作る。20は、鰭部の破片。段は鰭部外側が正段で内側は段がない。段の幅は約6.0cm。裏面に残る腹部取付部から、縦帶の位置より後方に腹部があることがわかる。飛鳥寺の鷲尾は、現状でA~Gま

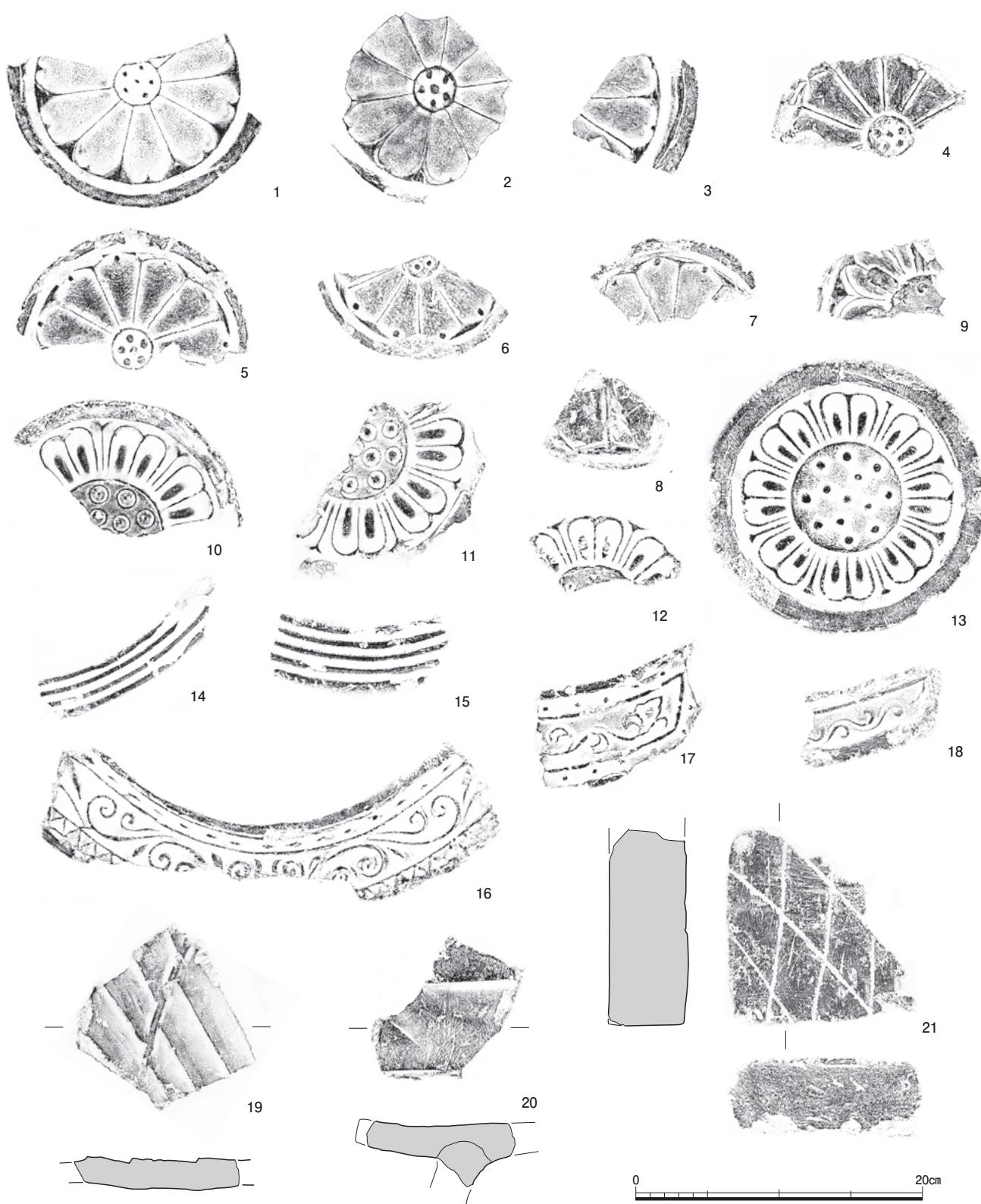


図140 第188-19次、第192-1次調査出土瓦磚類 1 : 4 (1・7・11・13・16は第188-19次出土、それ以外は第192-1次出土)

で確認されているが²⁾、19・20はどれにも該当しない。

21は磚。斜格子のヘラ書きが片面に入る。厚さ6.4cm。反対側の面は、丁寧にナデ調整がされており、ヘラ書きのない面を上面にして据える敷磚とみられる。このほか、本調査区からはヘラ書きのない磚も出土した。

本調査区出土の瓦磚類は、軒丸瓦は飛鳥寺創建瓦の飛鳥寺I・III型式と7世紀後半のXIV型式が大半を占め、飛鳥寺中心伽藍を調査した飛鳥寺第1～3次の出土様相とも合致する(『飛鳥寺報告』1958)。ただし、飛鳥寺第1～3次調査ではごく少数だった、川原寺同窓の軒丸瓦

表21 第188-19次、第192-1・9次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
飛鳥寺	I a	14	飛鳥寺	II	17	鴟尾	5
	I b	14		III	2	ヘラ描き丸瓦	9
	I c	2	重弧文		9	ヘラ描き平瓦	15
	I	9	飛鳥寺	IVB	3	文字瓦	3
	III a	3	飛鳥寺	VI	4	戯画瓦	1
	III b	5	不明（中世）		1	隅木蓋瓦	1
	III	3	不明（近世）		14	面戸瓦	9
	IV	1			50	熨斗瓦	2
	V	1				隅切平瓦	5
	XI	1				不明道具瓦	1
	X II C	3				瓦製円盤	15
	X II E	1				磚	53
	X IV a	1					
	X IV b	28					
	X IV	3					
石神A?		1					
不明（古代）		10					
巴（近世）		13					
計		113					
			丸瓦		平瓦		棟原石
重量		1,076.7kg			3,992.5kg		13.4kg
点数		6,986			25,468		43

X II 型式や、軒平瓦 II 型式が本調査区では一定量出土したことは特徴的である。

また、本調査区出土の瓦磚がどの建物の所用かを考えた場合、近接する講堂がその候補の1つであるが、現状では講堂所用瓦の様相は不明であり、比較ができない。ただし、鴟尾は、講堂所用とされる飛鳥寺鴟尾Cは出土していない。今後、丸・平瓦を含めた総合的な瓦の調査を進めつつ、周辺の調査成果を待ちたい。（石田由紀子）

文字瓦 本調査区からは、文字瓦が3点出土した（図141）。いずれも平瓦である。1は凸面狭端近くに4文字記されるが天地は一定しない。部の字体は異体字のア。凸面調整は斜格子タタキ後、横ナデ、凹面は布目を残す。色調は赤褐色。飛鳥寺創建瓦とみられる。2も狭端近くに文字を記す。2の部も字体は異体字のア。「工」以下は人名と思われるが、省画が著しく判読できない。凹凸面とも丁寧なナデ調整で、側縁断面形態が剣先形を呈す特徴から、川原寺創建瓦を生産した五條市荒坂瓦窯産とみられ、7世紀後半に位置づけられる。3は、文字か否か不詳。凸面調整はナデ、凹面は布目を残す。7世紀後半か。1・3は第188-19次、2は第192-1次から出土した。

（石田・山本 崇）

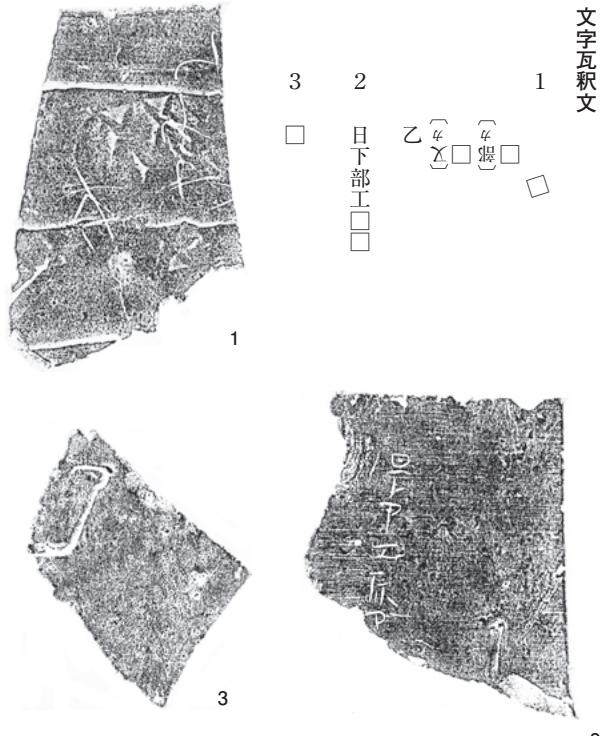


図141 第188-19次、第192-1次調査出土文字瓦 1:3

4 まとめ

今回の調査では、柱穴を含む小土坑多数のほか、東西方向の溝状の落ち込みを検出した。柱穴は、掘方が一辺約40~70cmの隅丸方形を呈するものが主体で、埋土に明確な中世以降の遺物を含まないことからみて、古代にまで遡る建物などの一部と考えられるが、調査区が狭小であったため、建物や塀としては確認できなかった。

遺物では、③黒褐色土層とSX2035から出土した飛鳥寺創建期のものを含む大量の瓦が特記できる。古代の軒瓦は163点、磚は53点あり、全体の出土量は整理箱で350箱を超える。この大量の瓦は、近接した位置に瓦や磚を使用した何らかの施設が存在していたことを示唆する。

限られた面積の調査ではあったが、これまで調査が希薄であった飛鳥寺北部域の状況の一端をあきらかにすることことができた。多量に出土した瓦磚類は、今後の瓦研究および飛鳥寺研究において基礎となる資料である。

（土橋・尾野）

註

- 高橋透「藤原宮東面内濠SD2300出土土器(1)－第24次調査から」『紀要 2012』報告の椀Z (161~174)。
- 飛鳥資料館『日本古代の鴟尾』1980。